ハンガーゼロニュース　第406号　発行日2024年4月20日（毎月20日発行）定価15円

ハンガーゼロ（日本国際飢餓対策機構）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体（NGO）です。1981年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、海外スタッフ派遣、飢餓啓発を行っています。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、20ヵ国、国内外の80のパートナーと協力し、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、「こころとからだの飢餓」に応える活動をしています。

森 祐理ハンガーゼロ親善大使

トルコ被災地を慰問

ハンガーゼロ親善大使の森祐理さんが4月12日からトルコを訪問、昨年2月のトルコ・シリア大地震で被災された人々を励ます慰問活動を行なっています。この訪問にはハンガーゼロの緊急支援チームとして昨年現地に派遣した申スタッフも同行しています。次号6月号にて森さんの訪問記を掲載予定です。

脱北 夫婦音楽家の
台湾・能登半島地震被災者支援

チャリティ音楽会

5月18日から26日、大阪・奈良の6ヵ所で開催します。詳しくはホームページでお知らせします。席上募金があります。

南インドのオーガニック茶葉

フレーバーティーセット

パッケージがエコロジーの観点から新しくなりました。全てティーバッグで1パッケージに10バッグが入っています。

シナモン、ジンジャー、カルダモン、マサラの4種類各1パッケージ、計4袋まとめて1セット送料込2,000円です。カフェインフリーではありません。

お支払い：銀行振り込み、または郵便振替の後払い

※送金はキングダムビジネスまで。

お申し込み：
㈱キングダムビジネス
スマートフォンは右のQRコードから
電話注文：06-6755-4877

【ウクライナ緊急支援募金】

募金は…①郵便振替　②ホームページからのクレジットカード決済利用の2種類
①郵便振替　00170-9-68590 一般財団法人日本国際飢餓対策機構　「ウクライナ緊急支援」と明記
②ホームページ　募金画面からクレジットカード、コンビニ決済がご利用いただけます。※現地の活動はFacebookでも報告しています。

聖書の学び会
イエス・キリスト エクレシア
よろこび研究会

真理はあなたを自由にします。ヨハネ福音書8章32節
── この御言葉を中心として「よろこび」を学んでいます ──

真理のことばで"よろこび"をお届けしています。
① 聖書のみことばをわかりやすく
② 日常生活に適用できるように
③ より実践的に

毎月新たな聖書箇所を読み、お一人お一人の状況に照らしてメッセージをしていきます。**初めての方でも大丈夫です。**
共に学び、よろこびを探求しましょう。
メッセンジャー：奥田英男　【参加自由・無料・席上献金有り】

Info@yorokobi-lab.com
042(553)0511 ㈱オクダコーポレーション内

サポーターお申込み欄 FAX072-920-2155

ふり 氏 名 / がな	
(TEL)	
住 所	〒
申込日	年　月　日　NL406号

✓	下記から希望されるものをお申し込みください
□	ハンガーゼロサポーターとして協力します。 ①毎月（　　）口（1口1,000円） ②一時募金として　　円協力します。
□	継続募金（JIFHサポーター）として協力します。 毎月（　　）口　（1口500円）
□	チャイルドサポーター（子ども1人毎月 4,000円）の説明書（申込書）を送ってください。
□	郵便自動引落し申込書を送って下さい。
□	その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

※◀記入後にスマホで撮影し、下記メールアドレスにお送り頂いても受付いたします。

上の申込書をコピーして、必要事項を記入の上、FAX又は郵送にて大阪事務所までお送りください。確認書類等を送らせていただきます。お電話やウエブサイトでも申し込みできます。

ハンガーゼロサポーター　現在…5338口　チャイルドサポーター　現在…1155人

■発行者　清家弘久
■発行所　一般財団法人 日本国際飢餓対策機構
ハンガーゼロで検索！
Webサイトアドレス　http://www.hungerzero.jp
eメールアドレス　general@jifh.org
フェイスブック　facebook でハンガーゼロで検索

■募金方法　※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウエブサイトで
①郵便振替　00170-9-68590　一般財団法人日本国際飢餓対策機構
②他の金融機関からの自動振替③クレジット、デジタルコンビニ

「つながる募金」（旧かざして募金）に変わりました。ソフトバンクスマホの方は、Tポイントで募金ができます。

大　阪　〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
（広島/沖縄）TEL（072)920-2225　FAX（072)920-2155
東　京　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCCビル517号室
（東北）TEL（03)3518-0781　FAX（03)3518-0782
愛　知　〒460-0004 名古屋市中区新栄町 2-3 YWCAビル 6F
TEL（052)265-7101　FAX（052)265-7132
ＵＳＡ　Ainote International c/o Mr. Takehiko Fujikawa
8010 Phaeton Dr. Oakland, CA94605
TEL(510)568-4939　FAX(510)293-0940

Hunger Zero
JIFH
チャイルドサポーター

●Tポイントを利用して「南スーダン・マプイ小学校給食支援」ができます。現在までに1,715,223ポイント（円）のご協力（25,672件）がありました。Tポイント募金で検索。
●「つながる募金」はスマートフォンからご利用できます。募金は、ソフトバンクモバイル(株)経由となります。詳しくはウエブサイトをご覧ください。

わたしから始める、世界が変わる

Hunger Zero News
ハンガーゼロ・ニュース

1分間に17人（内12人が子ども）
1日に2万5,000人が
1年間では約1,000万人が
飢えのために生命を失っています

2024
5
No.406

Hunger Zero News 今月号の内容

台湾東部沖地震「緊急募金」　P.2
続報・能登半島地震緊急支援　P.3
西南学院大学フィリピンキャンプ ～参加学生15名の感想文ほか～　P.4-7

2024/4/3 M7.2
台湾
東部沖地震
緊急募金

FH= 国際飢餓対策機構

2024/4/3 M7.2

台湾 東部沖地震 緊急募金

緊急物資を配布

水を受け取る被災者

低所得世帯に緊急物資
「心のケア講座」も視野に

台湾国際飢餓対策機構
代表　曾（ツォン） 正智（チョンヂー）

2024年４月３日、M7.2の巨大地震が台湾東部の花蓮（かれん）県を襲いました。2,400人以上の死者を出した1999年の「921大地震」に次ぐ大きな揺れで、土砂崩れや建物の倒壊により死者16名、行方不明2名、そして約1300人が負傷しました。（4月16日現在）しかし当初心配されたほど被害は広範囲に及ばなかったことに、胸をなでおろしました。

発災直後から台北に事務所がある台湾国際飢餓対策機構（以下：FH 台湾）では、被災地で支援活動を開始した「花蓮ミッション・ユニオン」と連携して、情報の収集と募金の呼び掛けを始めました。また日本のハンガーゼロから紹介を受け、緊急物資を被災地にいち早く届ける GEM（グローバル・エンパワーメント・ミッション）の台湾担当者とも、連絡を取ることができました。

そして発災から１週間後の4月9日、FH 台湾代表以下２名のスタッフが花蓮市へ出向き、被災者の葬儀に出席すると共に、幼児や高齢者、貧困家庭のため、水やミルクなどの緊急物資を届けました。

現地調査で貯水タンクの必要に対応

水の配達

被災地を訪問して分かったことは、地震により貯水タンクが破壊され困難を覚えている家庭が多いことでした。そのため FH 台湾は花蓮ミッション・ユニオンを通じて花蓮県に多く住む台湾原住民の低所得世帯に対して、貯水タンクの提供を計画しています。

また現在、被災地では多くの方が地震の恐怖におびえ「心的外傷後ストレス障害（PTSD）」になっていることを知りました。FH 台湾はこれまでも毎年「大規模災害における心のケア」講座を開催してきましたが、今回の被災者に対し少しでもセミナーへの参加負担を減らせるようにと考えています。これらのための予算は合わせて約200万円です。

日本の皆さんのお祈りと善意の協力はいつも私たちを励まし、私たちが一人ではないことを教えてくれます。地震という災害をも通して、私たちは一つの家族であることを知ることができ感謝しています。

募金はクレジットカード又は郵便振替で

左のQRコードからすぐにオンライン募金ができます。
クレジットカードやコンビニ決済がご利用できます

【郵便振替での送金は】
00170-9-68590
日本国際飢餓対策機構
「台湾地震」明記

備蓄をしながら社会貢献

世界にパンを届けよう
救缶鳥 Kyu-Can-Cho

皆様から回収された救缶鳥は各地に飛んでいきました！

食料が不足している、
国内外の豪雨・地震等の災害被災地や、
海外の飢餓地域等へ送られました。

CONFECTIONERY AKIMOTO
おいしさと夢をお届けします。
株式会社パン・アキモト

パンの缶詰 since 1995

〒329-3147
栃木県那須塩原市東小屋295-4
TEL 0287-65-3351

パン・アキモト 検索

広報より：台湾及び能登半島地震支援情報は、速報性重視の観点からフェイスブックや YouTube チャンネルで先行公開中です

Hunger Zero 能登半島地震緊急支援

3月25日～29日、藤谷スタッフとボランティア１名と共に支援組織「能登ヘルプ」に合流し、物資援助や片付け作業などを行いました。長期ボランティアの瀧浦さんは協力団体 LOVE EAST による活動を継続しています。（報告：大阪事務所・柳瀬ひかる）

【珠洲市】　温泉施設に継続的な支援

市街に入った途端、道路や橋の寸断、潰れた家屋やがれき、傾いた電柱などが次々に目に入り、被害の大きさを実感しました。珠洲は上水が復旧したところが半分ほど、下水はほとんどまだのため、簡易トイレを使用しておられるとのことでした。

能登ヘルプからの物資をお届けした温泉施設では、本館が全壊となりましたが、物資や燃料の支援を受けながら、別館の貸切風呂を入浴・宿泊施設として整えたそうです。３月末現在、地域被災者の方々や電力会社の作業員の方などが利用されており、週末からは宿泊客の受け入れも再開されるとのことでした。「ここまでしてくれる団体は他にない」と何度も仰っていたのが印象的でした。能登ヘルプの支援は他にないきめ細やかさがあり、本当に必要としているものを支援してくれているとのことです。

【輪島市】　輪島塗の漆器店で片付け応援

快晴の空の下、自宅を片付ける方や災害廃棄物の回収業者、インフラ復旧の作業員など、たくさんの方が屋外で作業をしておられました。

私たちが作業に参加した輪島塗の漆器店では、蔵に収められていた漆器等が前日の作業で手前の部屋に集められていました。それらを10人のリレー形式で運び出し、トラックで近所の建物に避難させました。その後、廃棄家電の回収にそなえて家電を外に運び出し、大きなゴミや扉、収納棚などの移動を行いました。

今後どうするにしても建物内の物を運び出さないことには始まらないそうで、「夫婦２人だけでは一生このままだった」と感謝の言葉を頂きました。４月以降も能登ヘルプからボランティアを派遣する予定です。

輪島市の火災現場にて

復興は地道な歩み

支援地域への道中は、地震でできた段差や割れたアスファルトの散乱、復旧工事などがあり、徐行する必要が頻繁にある上に支援地が遠いため移動に時間がかかり、活動は１日にせいぜい3時間程度でした。支援を必要とする方々がまだまだ多くおられ、失ったものの大きさに比べればはるかに小さな歩みが復興現場で続けられていくのだと実感しました。

自分が何の役に立っているのだろうとさえ思えた支援活動中、見知らぬ人間である私たちに「こんにちは、ありがとう」と声をかけて下さった通りすがりの地元の方に心温められました。復興に向けて進んでおられる能登の方々の応援を引き続きよろしくお願い致します。

募金はクレジットカード又は郵便振替で

左のQRコードからすぐにオンライン募金ができます。
クレジットカードやコンビニ決済がご利用できます

【郵便振替での送金は】
00170-9-68590
日本国際飢餓対策機構
「能登地震緊急募金」明記

ロングライフタウン寝屋川公園 フィレンツェの丘

私たちロングライフグループは、
ハンガーゼロの活動を応援しています。

ロングライフは1986年の創業よりケアサービスひと筋。全国に展開しています。

Health & Natural Beauty ロングライフグループ　Resort & Long Life 1986
0120-550-294（こわふくし）　受付時間 9:00～18:00 年中無休

大阪本社／〒530-0015 大阪市北区中崎西2-4-12 梅田センタービル25階　東京本社／〒100-0004 東京都千代田区大手町1-6-1 大手町ビル9階
ロングライフグループ拠点：北海道／埼玉／東京／神奈川／千葉／静岡／愛知／大阪／兵庫／京都／大分／沖縄／中国（青島）／韓国／インドネシア（ジャカルタ）

西南学院大学フィリピンワークCAMP

印象に残ったエピソードと感想

2024年2月22日～3月1日に西南学院大学から15名の学生がフィリピンワークキャンプに参加し、現地で様々な活動や人とのふれあいを体験しました。学生全員にとって初めてのフィリピンはとても刺激的で、新しい発見がたくさんありました。学生はフィリピンでの活動に真摯に向き合い、いま自分たちにできることを一生懸命考え、自分たちの置かれている環境に大いに感謝する素晴らしい時間を過ごしました。

愛を流す

人間科学部　心理学科４年　笠（りゅう）　葉月（はづき）

「世界のために、今の自分に何が出来るか考えたことはありますか」これは、活動のはじめにFH（現地支援団体）の方が私たちに問いかけた言葉です。「小さくても良いから自分の身近な人に愛を流していくことが大切であり、フィリピンの街をみて、自分に何が出来るか、何が出来ないか考えると思うけれど、『小さなことに大きな愛をもってやりなさい』というマザーテレサの言葉を思い出して欲しい」と紹介してくださり、この言葉が私が活動する上でのテーマとなりました。

実際に街に出ると貧困と経済格差を目の当たりにし、自分に何が出来るのか不安に襲われましたが、子どもたちに会った瞬間、そのパワーに圧倒されました。小学校で交流した際に、名前を呼び合いハグするという流れが多く、関わる時間は短くても、お互いの存在を確かめ合い、認め合い、大きな愛に包まれるような感覚になりました。礼拝でのお話から、この温かさや愛情の深さはキリスト教の精神によるものではないかと考え、幸せとは愛を共有することではないかと感じました。自分ももっと愛を伝えたい、深く関わりたいと強く思い、より多くのハグと言葉で感謝と愛を示すように心がけました。

日本でも何事も他者に目を向けて、自分ごととして向きあっていくことを大切にしたいと強く感じました。そのために多くの人と関わり、経験し、考えることが必要であると確信することが出来た時間でした。この９日間は今までの人生で最も濃く忘れたくない、貴重で大切な経験です。関わってくださった全ての人に深い感謝を捧げこれからも愛を流し続けます。

学生の私たちに何ができるか考えた日々

法学部　国際関係法学科２年　森山和奏（もりやまわかな）

「あなたたちが訪れたことで、ここで暮らす人々は世界から見捨てられた存在ではないことを認識することができる」。私が、このワークキャンプで一番印象に残った言葉です。９日間のフィリピンの滞在で私は何ができるのだろうか、という思いを抱きつつ渡航しました。小学校や教会を訪問し、衛生教育やダンスの披露、折り紙を子どもたちに教える中で、子どもたちが喜んでくれている姿を見て、出し物や折り紙を準備してきて良かったと純粋に嬉しい気持ちになりました。それとは裏腹に、実際に子どもたちの話を聞く中で、余命宣告された母とは離れて暮らしていて、お金がないために生きている間にもう母に直接会いに行く事は出来ないかもしれないという話や、ドレスを買うお金がなく憧れのダンスパーティーに参加することができないなど、心を開いて子どもたちが話してくれているのにも関わらず、話を「うん、うん」と聞くことしかできない自分自身の無力さも感じていました。同じように感じていた他の西南生とも私たちに何ができるのだろうかと何度も話し合い、頭を悩ませた日々でした。

そんな中、一緒に活動してくださったFH（現地支援団体）のスタッフが、「あなたたちの活動は、貧困地域に暮らす人々をempowerして（力づけて）いるのだよ」と教えてくれました。私たちが訪問し、彼らと関わることで、彼らは自分たちが社会から、世界から見捨てられた存在ではないことを認識することができる。そして、その認識が自分たちの社会を良くしていこうとする思いの後押しになるのだということを学びました。国際協力の現場では、一方的な支援をするのではなく、人々が自らの力でよりよい社会を構築していくことが鍵となると言われますが、つまりそれは、人々に寄り添うことが根本的なものなのではないかと感じ、現地を訪れることが国際協力の初めの一歩なのだということを実感しました。

机上やニュースで学ぶだけではなく、聖書にあるように、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」ことを実践することで社会問題に取り組める人材になりたいと感じています。

マングローブの木の如く

〈引率〉宗教主事　劉（リュウ）　雯竹（ブンチク）

６年前初めてワークキャンプに参加した際に訪れたマラボン小学校に、今年は再び足を運ぶことになりました。学生たちが当時、子どもたちの校舎の裏側にマングローブの苗を植えたのを覚えています。その辺りには小さな川があったものの、ゴミが散乱し、水が汚れていて、動物の死骸もあったと当時の引率者の一人は振り返ります。

今回、再び訪れた時に、マングローブの背丈が伸び、その周りに緑が増えたことに感激しました。マングローブの木を植えた理由として、大気中の二酸化炭素を減らし、地球温暖化の進行を食い止めることや、周辺地域の生態系に深く関わり、様々な生き物たちの命を育む役割が挙げられます。

マングローブの背丈が伸びたように、今回の活動に参加された学生たちの成長を身近で感じることができました。「百聞は一見に如かず」という諺（ことわざ）があります。体験しなければ見えない世界と他者と深く出会い、体験した人にしか語れないことを、生き生きと語る時の学生たちの姿に希望を感じました。

若者たちを待ち受ける未来がどのようなものであるかは知り得ませんが、時代や環境がどんなに変化しようとも、参加者の皆さん一人一人が、今後マングローブの木のように成長し、平和を作り出す者になる、と私は確信しています。

現地のコミュニティを知って

人間科学部　児童教育学科２年　中原（なかはら）あい

私が1番印象に残った、考えさせられた活動は、７日目の生活体験です。一般家庭にお邪魔させて頂き、仕事体験をしたり一緒にご飯を食べたり、交流を深めるプログラムで、私はナボタスにある家庭を訪問しました。

それまで車窓からしか見ていなかった貧困地域に初めて足を踏み入れ、現地の人と関わったことで、沢山の衝撃、発見がありました。 トイレや水など衛生環境の悪さや、ゴミのポイ捨て、町や子どもたちの臭い、路上に座り込む痩せ細った人、お肉屋さんに群がる虫など、貧困地域の現状を多く目の当たりにしましたが、特に印象深かったのは地域コミュニティの繋がりの強さです。日中は家の前で話す大人や、大人数で遊ぶ子どもたちで路地が賑わっており、近所の人向けの小さな出店がいくつもありました。ご近所付き合いが希薄化している日本とは正反対に、お互いに顔見知りでコミュニティ全体がひとつの家族のように見えました。見知らぬ私たちに対しても、全ての人が笑顔で温かく挨拶をして下さり、親切・フレンドリー・愛に溢れた、などと言われるフィリピン人の国民性が至る所で見て取れました。

９日間、貧困問題・衛生問題について西南メンバーと沢山議論してきましたが、この日の生活体験を通して新たな気付きがありました。それは、人々の生活と切っても切り離せないコミュニティの存在です。 貧困地域ではトタン屋根の家同士が重なり合っているため簡単に建て替えや引っ越しができない状況であり、また大切なコミュニティから離れることはフィリピンの人々にとって避けたい事です。よって、不衛生な環境が蓄積し、改善に至らないという結果に繋がるのではないかと感じました。 私たちは、貧困や衛生環境の悪さなどの目の前の事実や数字、外部の情報などから解決策や支援方法を考えがちですが、実際にそこに住んでいる人のコミュニティ、国民性、文化、習慣を知った上で社会問題と向き合っていくことが大切なのだと気付かされました。

感謝と尊敬

経済学部　国際経済学科３年　河野孝太郎（かわのこうたろう）

フィリピン人の生活を見て「もったいない」の精神が日本より強いと感じました。私たちが乗っていたバンはとても年季の入ったもので、修理を繰り返した跡があったり、バックミラーには最新型のモニターのようなものを利用したりしていました。また、家庭体験でお世話になった家族では食品を一粒残さず食べたり、ビニール袋を再利用したりする姿が印象的でした。物を大切にする精神は、私たちが見習うべき点だと気づかされました。

一方、課題として「衛生問題」が印象的でした。街中に落ちているごみ、様々な場所で感じる異臭、川や池に直接流れる下水、自動車の排気ガスなど健康に生きるための弊害となる問題が蔓延していることを体感しました。私たちが行った子どもたちへの手洗いや歯磨き指導が、人々にとって少しでも衛生問題を考えるきっかけになればと願っていますし、今後も私にできることを考えていきます。

現地の小学生と先生方、教会の方々、家庭体験で一日を共にしたご家族、訪れた地域の方々、FHのスタッフなど数えきれないほどたくさんの方々と楽しく交流し、触れ合うことができたことが一番印象に残っています。フィリピンの方々は想像以上に明るく、温かく、優しい方ばかりでした。９日間を通して、怒っているフィリピン人を見ることはありませんでした。そんな中で、私に強く沸き上がった感情があります。それが「感謝」と「尊敬」です。見ず知らずの私たちを受け入れてくれた現地の方々への感謝と、決して日本より快適とは言えない環境で過ごす彼らに対する尊敬の思いです。そしてこの思いは、生活を共にしたチームメンバー、引率してくださった皆さんにも抱いています。互いに助け合い、高め合ったメンバーとして感謝と尊敬の気持ちでいっぱいです。さらに、感謝と尊敬から生まれるのが「愛」だと自分なりの答えにたどり着きました。誰に対しても、どんなものに対しても感謝と尊敬を忘れず、愛する気持ちでこれから過ごしていきます。ありがとうっぽ！ Salamat po!

西南学院大学フィリピンワークCAMP

活動中のこぼれ話

外国語学部　外国語学科４年　鈴木結芽（すずきゆめ）

活動中、飲食店の前で食べ物をくれるようお願いする子どもたちや、路上でお金を要求する人を見かけることがあった。一方で、飲食店で食事を楽しむ人々や、時には食べきれないほどの食事を提供してもらった私たち。この格差に愕然とした。雇用など、食べ物やお金を要求するほどの彼らの生活を変えるための何かも必要であり、考え続けていきたい課題だと感じた。

法学部　国際関係法学科３年　德永彩乃（とくながあやの）

毎日活動後にあった「西南タイム（毎日の振り返りの時間）」が私の中で一番貴重な時間だったと感じます。15人が1日を振り返った時に気づきや本音を言い合った時間は、たとえ疲れていても自然と集中できたし、毎日違った涙を流すという今までの人生にはなかった仲間と話す時間でした。

外国語学部　外国語学科２年　小田佳映（おだかえ）

現地の子どもたちに折り紙を教えているときに、最初はシャイで静かな子たちでしたが、自分の武器である笑顔を持って常に接していたら、折り紙が完成した時にはニヤリと笑顔を見せてくれて、私も幸せな気持ちになれました。色んな感情が交錯した今回の活動でしたが、これからも常に周りの人に「愛」を持って接することを心掛けて行動したいと思います。

国際文化学部　国際文化学科２年　斉田さくら（さいた）

活動のなかで一番感動したのは、フィリピンの教会の日曜礼拝に参加し、バンドの生演奏と一緒に聖歌を歌ったことです。現地の方が歌詞をモニターに表示してくださっていたこともあって、初めて聞く曲ばかりなのに、みんなで歌い、教会全体の一体感を感じることができました。厳かな教会のイメージを覆すほど明るくて壮大で、体を揺らしながらみんなで歌った時間は忘れられない思い出です。

外国語学部　外国語学科１年　松本凌弥（まつもとりょうや）

フィリピンに行く前にタガログ語を勉強していて、実際に現地の人にそれが通じたときはとても感動しました。知っている言葉が多いとその分皆の手助けができたり、コミュニケーションの幅も広がるため、事前に勉強しておくことはお勧めです。また、タガログ語だけでなく英語もある程度できるようにしておくことで、現地の人たちからの様々な深い内容の話が理解できるためとても勉強になります。

人間科学部　心理学科１年　栗本美優（くりもとみゆ）

私は車での移動中は町を観察しながら過ごしていた。道路と道路を仕切る形で花壇があるのだが、大体は大量のごみが捨てられていたり、住む場所のない人々が荷物を広げ横になっている光景ばかりだった。しかしある一角だけは違った。赤やピンクの花が咲き誇り緑が生き生きとしている。決してきれいとは言えない身なりの男性２人が、その花に一生懸命水を与えていた。その光景を私は車窓でほんの数秒の間に目に焼き付けた。花壇の花を見てひときわ美しく思い感動したのは、咲き誇った花が、生活が苦しくても自分たちの芯や個性を大切に生きていこうとするフィリピンの人々の姿と重なったからだと感じた。

人間科学部　社会福祉学科１年　朴　妤苑（パク　ヨウォン）

普段座学で得る社会問題はどこか他人事のように感じており、問題提起はされているのにも関わらず何故未だに解決に進んでいないのか、という疑問を社会福祉を学ぶ中で強く抱いていた。「幸せの形は人それぞれ」という言葉があるものの、貧困地域で生きる人はそのように考えているのだろうか、一定水準の経済力を持つ私たちだからこその考え方ではないのだろうか、という疑問を抱いていたが、日帰りホームステイ先で自身が固定概念、先入観に捉われていることに気づかされた。「幸せと経済的貧困は比例するものではない」、決して広いとは言い難い家に大家族で暮らす彼らにとって家族がどれほど大切でかけがえのない存在なのかをこの言葉から考えさせられた。

「手洗い」を教える寸劇

日本の折り紙で子どもたちと交流

これまでの私・これからの私

国際文化学部　国際文化学科４年　吉原　凜（よしはら　りん）

私は４月から福岡市の職員として働き始めます。公務員は人と社会のために幸せな生活の舞台を作り、支える仕事を担う職業だと考えています。人によって幸せの感じ方は異なるし、幸せがいったいどういうものなのかは答えが出ない問いで、困難もたくさんあると思いますが、今回の活動で考えたことを思い出しながら日々働いていきます。

外国語学部　外国語学科２年　工藤琉楠（くどうるな）

この活動が人生で初めてのボランティアとなりました。短い間ではありましたが、これをゴールだとは思わずに、ここからがスタートという覚悟で様々な問題について考えたいし学んでいきたいと思いました。その際も、「小さなことの積み重ね」を大切にしたいです。そして、マラボン小学校に６年前先輩方が植えた苗が木に成長したマングローブのように、大きく根を張り繋がっていきたいと感じました。

経済学部　国際経済学科２年　安里優来（あさとゆうき）

これまでは、沖縄の珊瑚の植え付けなどのボランティアに参加した程度でしたが、今回の海外でのボランティアは、日本で行うボランティアと全く違う経験が出来ました。私自身、英語が苦手な為、言語でのコミュニケーションに苦戦しました。もっと沢山のことを知るために、言語の勉強を頑張りたいです。

人間科学部　社会福祉学科１年　末次くるみ（すえつぐ）

私は今回実際にいろんな人と触れ合う中で、貧困＝不幸ではなく、私たちが勝手に不幸だと決めつけているだけなのかも知れないと考えた。小学校や教会で出会った子どもたちが本当に貧困なのかというと分からない。しかし、その人にとって家族や周りの地域の人たちと今の一瞬を大切に一生懸命に生きていくことが大事と気づいた。なぜ今回このボランティア活動をしたのかと考えたとき、パフォーマンスや衛生教育、折り紙などを通し少しでも生きる希望を持ち、それが子どもたちの将来のプラスになってほしいからだと思った。

高知ベンテコステ教会隣接のクリニック
医療法人オリーブ
大川内科
循環器内科・内科・老年内科
院長　大川 真理（おおかわ　まこと）

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい

〈引率〉ボランティアセンター職員　塚田恵美子（つかだえみこ）

今回のプログラムでは、ワークキャンプの事前事後合わせて６回の研修を行いました。

事前研修では、フィリピンの歴史・文化、トレンド、貧困についてグループ学習を行い全員で共有したり、日本国際飢餓対策機構職員による講義を受けました。また、現地での衛生教育活動のための寸劇や手洗いダンス・歯磨きダンス、交流活動のための折り紙や出し物の企画から練習まで、研修時間以外にも様々な準備を行いました。現地では、毎日活動後に「西南タイム」（表紙に写真）で様々な思いを共有し、宗教主事の選ぶ聖句を心に留めつつ一日を振り返りました。学生たちは、日々、翌日の活動の対象者や会場に合わせて、タガログ語での自己紹介を考えたり、出し物を改良するなどしていました。

フィリピンでの9日間には、タイトルの聖句「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。（新約聖書ローマの信徒への手紙12章15節）」を感じる場面が数多くありました。共に喜び、共に泣く心は、現地の方々や、学生同士、私たちスタッフにも向けられていました。帰国後研修の最後の西南タイムで気持ちを分かち合い、報告書作成や報告会準備に勤しむ姿やチームワークに触れ、改めてそう感じています。

様々な経験をして成長した15人が、キャンパスの内外や職場など、この春からの新生活の場に新しい風を吹き込んでくれる、そんな予感がしています。

※後日、ハンガーゼロのホームページで今回掲載できなかった学生の「エピソードと感想」（P.4-5 参照）を公開する予定です。